

2012 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(45点)

結婚において、社会に流動をつくりだしていくのは、女性である。ところが、クリスマスの祭りでは、それを死者や死者を表象する者たちが、担うことになる。死者の領域との間に、象徴的な通路を開くことによって、生者と死者の世界をともどもに巻き込んだ宇宙には、目に見えない何かの力の流動が発生する。クリスマスは、宇宙的な「交通」をつくりだそうとした祭りなのだ。これが、『火あぶりにされたサンタクロース』という論文における、レヴィイ・ストロースの見解であるが、この見解は、フレーザーにはじまる人類学的探究のじゅうぶんな蓄積を背景にして、得られたものだ。

フレーザーは『金枝篇』の中で、ヨーロッパで広くおこなわれているクリスマスというキリスト教の祭りが、もともとは、冬至の期間をはさんでおこなわれていた「異教の祭り」を原型としていたものであったことを、⁽¹⁾ポウタイな文献の裏付けをもって、あきらかにしようとした。太陽の力がもつとも弱くなる冬至の期間、生者の世界に、おびただしい数と種類の死者の霊が訪れてくる。この死者の霊のために、生者たちは、心をこめたさまざまなお供物の贈り物をしたのである。その死者を表象する者として、いろいろな仮面の神が、登場してきた。子供や若者組の乱暴な行為が、それを表象することもあった。しかし、クリスマスの原型である「冬の祭り」の、もつとも重要なポイントは、生者が死者の霊にたいして贈り物をする、という点にあった。それが、「クリスマスの基本構造」となっていたのである。

太陽の力がもつとも弱くなり、万霊がこの世をみたとされる冬のこの季節、ヨーロッパの村々には、かなりの長期間にわたって、死者の霊をあらわす、さまざまな存在が出現した。大きな仮面をかぶっている者たちもいれば、ガラガラ、ヒュンヒュンという恐ろしい騒音を立てる楽器を手にした若者たちもいれば、隊列を組んで家々を訪ね歩いて、食べ物やお菓子やお金を要求していく子供たちの一群もあった。農村の家族は、この期間の夜は、じっと家の中におとなしく暮らして、仮面や騒音楽器を手にした、若者や子供の一隊がやってきたら、彼らを丁重に迎えて、彼らの望みどおりの贈り物をあたえてやらなければならなかった。

そうしなければ、コクモツや家畜が、来年になって豊かな収穫や増産をあたえてくれないだろうし、新婚の家庭には子供がさずけられないかもしれないし、家族に不幸がおこってしまうかもしれない、という恐れがあったからである。太陽がかげつた冬の村々を、死者の霊の群行がおおいつくした。生者はそうやって訪れてくる死者の霊を、快く迎えて、手厚い贈り物をあたえて、彼らに気持ちよく去ってもらおうと、さまざまな手のこんだ祭りをおこなったのである。

ヴァン・ジュネツプやヴァラニヤツクらの民俗学者の研究によって実証されたように、ヨーロッパではキリスト教が影響力をふるうはるか以前から（ことによつたら旧石器時代から）、真冬のこの時期には、死者の霊の群行を演じる祭りが、きわめて広い範囲でおこなわれていた。古代の大都市ローマにおいてさえ、冬至をはさんでサトゥルヌス祭をはじめとする、異人の襲来を表象する祭りが盛大におこなわれていた、という記録が残されている。

国家の宗教の地位をかち得たローマのキリスト教が、もともとは夏に生まれたという伝承のあるイエスの誕生日を、なぜこの真冬の季節にもつてきたのか、その理由についてははっきりしたことはわからない。しかし、ひとつだけはっきりしていることは、その選定が、キリスト教の世界化のために、大きな貢献をおこなうことになった、という事実である。イエスは、自分が真冬に生まれたという、後世の捏造ねつぞうに同意することによつて、キリスト教が大衆の間に受け入れられていく条件を整えたのだ。クリスマス祭を真冬とした決定は、グレゴリオ聖歌の発明にまさるともおとらない、ローマ教会のすぐれた営業感覚の勝利を(3)しめしている。

その後、ヨーロッパの各地に勢力をのばしていったキリスト教会は、もともとは地方地方で思い思いの(4)意匠をこらしておこなわれていた「冬祭り」を、教会の行事に吸収していくために、大変な努力をはらったのである。「冬祭り」は、もともと (5)行事であつたから、祭り全体には、どことなく荒々しい、暴力的な雰囲気のみなきつていた。死者の霊に扮よした者たちは、恐ろしい大きな仮面をつけ、身体中を植物でおおひ隠し、気味の悪い騒音をたてる楽器を手にして、村々や町々にあらわれた。彼らは、大手をふつて生者からの贈り物を要求できる立場にあつたので、仮面の神の後ろに隠れて、若者や子供たちは、しばしば常軌を逸した荒々しい行動に、突入していったのである。死者には、生者たちのつくる世界の(5)掟に従わなければならない義務など

はない。そのことを逆手にとって、祭りの主役である若者や子供たちは、みずから「錯乱の王」「狂気の王」などと称した。その様子を見て、教会はこの祭りに、積極的な干渉をおこなわなければならぬ、と判断した。

キリスト教会は、ことクリスマス祭にかんしては、はじめから難⁽⁶⁾しいジレンマをかかえていたのである。死者の霊が来訪するこの霊的な季節に、闇の中に未来の救世主の到来を告げる一条の光をさししめず、幼な子の誕生を記念する祭りをもつてくることで、キリスト教会は、冬という季節にこめられた民衆世界の (7) な救済思想を、キリストへの信仰のうちに、吸収し、同化することに成功したのである。ところが、それと同時に、教会はこのやっかいな「冬祭り」をも、引受けなければならなかった。キリスト教は、死んだ者たちの魂が、最後の審判を待ちながら、現世とはちがう構造の世界に（それはのちに、地獄や煉獄^{れんごく}の思想として整えられるようになる）、おとなしく待機していてくれることを、期待した。死者の霊が、毎年毎年、贈り物を要求して、生者の世界を徘徊^{は徘徊}するような事態には、教会はがまんがならなかったのだ。

ところが、民衆の世界には、救世主の誕生と死者の霊の来訪とを同一の出来事としてとらえる、(8) 思考の伝統が、深く息づいていたのである。冬至の時期、太陽はもつとも力を弱め、人の世界から遠くに去っていく。そして、世界はすべてのバランスを失っていく。そのとき、生者と死者の力関係のバランスの崩壊を利用して、生者の世界には、おびただしい死者の霊が出現することになるのだ。生者はそこで、訪れた死者の霊を、心をこめてもてなし、贈り物を与えて、彼らが喜んで立ち去るようにしてあげる。そうすると世界には、失われたバランスが回復され、太陽はふたたび力をとりもどして、春が到来して、凍⁽⁹⁾てついた大地の下にあった生命が、いつせいによみがえりを果たす季節が、また到来してくることになる。「冬の祭り」は、生命の衰えとその復活をあらわす、大きな祭りのサイクルの、前半の部分を受け持っている。後半には、五月を中心にした「夏の祭り」がやってくるが、それは生命の復活をあらわすものとして、キリスト教会の「カーニヴァル—灰の水曜日—復活祭—ペンテコステ」のグレ⁽¹⁰⁾イサイクルと、まったく同じ思想を表現しているものとして、理解されていた。

だから、ここで「サンタクローズ」という言葉でしめされているのは、ヨーロッパ世界の教会が千年近くも抱え込んできたジレンマそのものである。そのジレンマは、カトリックのフランスでは、大革命の時期をへてさえも、第二次大戦が終了する

までは、かろうじて問題化されずにおさえられてきたのである。ところが、それがアメリカによる贈与経済の実行によって、あらわな形にロテイ(1)してしまう事態がおこったのだ。クリスマスは偉大なる贈与の祭りである。ヨーロッパの民衆世界は、その祭りをとおして、死者の霊との間に贈与の環わをつくりだし、キリスト教会にとつて、この祭りは、神が人類になした大いなる贈与(救世主が人類に贈与されたのである)の瞬間を祝う祭りにほかならなかった。

「アメリカ」が、その資本主義をとおして、これらの「贈与の主題」のすべてを、新しいスポットライトの下に送り込んだのである。商業主義の浸透は、クリスマスで大規模な商品の消費の季節につくりかえた。死者の霊への贈与の祭りは、いまや生者どうしが贈り物を贈与しあい、おたがいの間に心の絆きずなをとりもどそうとする、生者だけの祭りに変容しつつあった。サンタクロースがその象徴である。アメリカ的な健康さを象徴するような笑みをたたえたサンタじいさんが、子供たちに、豊かな商品経済の作物を、気前よく分配して歩いていく。キリスト教会にしてみれば、長年かけたせつかくの努力が、あんなハッピーなかつこうをしたサンタクロースの出現によつて、蹂躪じゅうりんとんされていくように思えたことだろう。

(中沢新一他『サンタクロースの秘密』による)

〔問一〕 傍線(1)(2)(10)(11)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(4)(9)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 傍線(3)「ローマ教会のすぐれた営業感覚の勝利」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ローマ教会が、生者と死者との間に、象徴的な通路を開くことにより、宇宙的な「交通」をつくりだしたこと。
- B ローマ教会が、死者の靈に扮して生者に贈り物を要求していた若者たちに、積極的な干渉をし続けてきたこと。
- C ローマ教会が、クリスマス祭を真冬の時期に定めるために、国家宗教としてのキリスト教の地位を利用したこと。
- D ローマ教会が、死者の靈の来訪する冬至に救世主の生誕祭を配置して、「冬祭り」を教会の行事に吸収したこと。
- E ローマ教会が、クリスマス祭に大規模な商品消費を容認することで、ヨーロッパに贈与経済を発展させたこと。

〔問四〕 空欄(5)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 暗闇の中で未来の救世主の到来を知らせる
- B 目に見えない力の流動を宇宙に発生させる
- C もっとも力を弱めた太陽に力を回復させる
- D 生者の世界への異人たちの襲来を阻止する
- E 死者の靈の生者の世界への来訪をあらわす

〔問五〕 傍線(6)「難しいジレンマ」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 冬至の時期は太陽の力が強くなり始める時期であるためイエスの生誕日にふさわしいのに、実際には生誕日の裏付けが聖書に見つけられないこと。

B 冬という季節にこめられた救済思想が、フランス革命の時期までは民衆世界に浸透していたのに、第二次大戦後には理解されなくなってしまうこと。

C クリスマス祭はもともと、救世主による人類への贈与を祝う祭りであるのに、教会の発展とともに生者どうしの贈与が一般化してしまうこと。

D クリスマス祭の時期に訪れる死者の霊は、生者の歓待を受ければ気持ちよく去っていくが、そうでなければ生者に危害を加える恐れがあること。

E 死者の霊は、キリスト教によれば最後の審判を待ちながらおとなしく待機すべきなのに、「冬祭り」では現世に出現して荒々しい行動に出ってしまうこと。

〔問六〕 空欄(7)(8)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはならない。

A 宇宙的 B 象徴的 C 人類学的 D 平和的 E 暴力的 F 潜在的 G 現実的

〔問七〕 次の文ア、イオのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア クリスマスの原型である「冬祭り」は「異教の祭り」であり、死者の霊を生者が丁重に迎え、彼らに贈り物をあたえることで、翌年の豊作や繁栄を願う行事だった。

イ 「冬祭り」で仮面をつけて死者の霊を演じる若者たちが見せる荒々しい行動は、生者と死者の力関係のバランスを崩壊させるものだった。

ウ ローマのキリスト教は、夏に生まれたという伝承のあるイエスの生誕日を真冬の季節に定めることで、キリスト教にとって悩みの種だった「冬祭り」を徐々に消滅させるに至った。

エ ヨーロッパの民衆世界では、太陽の力がもつとも弱くなる冬至に出現する死者の霊を生者がもてなすことは、太陽に力を回復させて春の到来を確実なものにすることに等しかった。

オ ヨーロッパの民衆世界では、クリスマスに生者は死者の霊と交流を持ってきたが、アメリカ主導の商業主義の浸透により、生者が死者の霊に行う贈与の意味が変わってしまった。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(25点)

大学時代に、ある先輩と議論をしたときのことだ。その人は、漫画研究部の部長で、自分でも漫画を描く人だった。その彼が、「人間は言葉によって思考している」と主張するのだ。言葉がなければ人間はものを考えることができない、という意味である。僕自身は、そんなことはまったくなく、と反論した。何故なら、僕自身、ものを考えるときには、言葉で考えるときと、映像で考えるときがあつて、だいたい半々くらいの割合だと自覚していたからだ。場所を思い浮かべたり、ものを作るときには、シーンや形を想像するわけだが、これは必ず映像である。数学の問題なども、ほとんどを映像でイメージする。けつして数字という記号(言葉)で考えているわけではない。あるときは、座標上に展開する曲面であつたり、あるいは幾何学的な形であつたりする。こういったものも、明らかに「思考」だと思われるし、また僕はたぶん人間なので、「人間は言葉以外でも思考する」という結論が導かれる。

僕自身は、自分の意見を強く主張するつもりはなかつた。何故なら、僕自身の一例だけで、既に彼の「人間は言葉で思考する」という見解が間違っていることは明らかなので、議論をして彼を説得する必要は二次的なものでしかない。それよりも興味があつたのは、「言葉でしか思考しない人間がいる」という事実である。少なくとも、そういう人間がいるから、そういう意見が出てくるわけで、その先輩もまたそのタイプの人なのである。彼によれば、頭に思い描く映像はあるけれど、それは「思考」ではない、ということらしい。ただ思い浮かべるだけで、そこに作為を加えること(展開)ができない、と主張するのである。しかし、作為が加えられないならば、映像を思い浮かべて、どうすれば良いか、こうしたらどうなるか、ここはこんなふうだろうか、もつとこうしてはどうか、といった思考はできない。数学(特に幾何学)の問題を頭では考えられないことになる。これも、「映像を自分の頭で変化させることができない人がいる」ことが、僕には驚きだった。

おそらく、工作のセンスというのは、一つにはこの「映像による思考力」だと思われる。映像でものが考えられるかどうか、というのは、絵が描けるかどうか、ともあまり関係がないようだ。というのも、絵を描くのが仕事の人(さきほどの先輩は漫画

が上手だった)でも言葉で考える人は多いし、逆に、文章を書くのが仕事の人でも映像で考える人もいる(僕がその一人だ)。

(1) 「オートバイが好きだ」と聞いて、「そうか、オートバイが好きなのか」と簡単に思い込める人は言葉で思考しているかもしれない。すると、プレゼントにオートバイの置物なんかを平気で贈ってしまうだろう。しかし、「オートバイが好きだ」という言葉が表す状態は、もっと広い。オートバイに乗ることが好きな人は、オートバイの置物なんかもらっても嬉しくもなんともないだろう。もしかしたら、乗ることはまったく興味がなく、オートバイの歴史について調べている人かもしれない。昔のオートバイにしか興味がないとか、あるいは、自分で設計したオートバイにしか価値を見出せない人かもしれない。そもそも、オートバイといったって、どんな形のものかを示しているのだろうか。⁽²⁾それをイメージしたいから、「え、どんなオートバイが好き?」と映像で思考する人なら尋ねるだろう。

子供から大人に成長する過程で、人は沢山の言葉を覚える。言葉を使いこなしてコミュニケーションをとることが、人間関係を保つための能力となるし、また社会的な立場を築くうえでもこれが有力な武器となる。ただ、言葉を覚えることで、そもそもそのものが持っていた情報の大半が失われることに注意をしなければならない。これは、単語だけではない。「これはこうすれば良い」といったノウハウも、言葉にした瞬間に単純化される。単純化によって、人へ効率的に伝えることができ、大勢で情報を共有できるけれど、その代わりに、本来持っていた情報の多くが欠落するのだ。

達人が持っているノウハウの大部分は言葉にならない。なんとか言葉になった一部を、周囲の人間が掬い上げる。そして、その欠片のようなものに縋ってしまふ。成功した人間の口から出たものが格言となるが、その格言を覚えただけで、あるいはたとえ実行しても、同じ成功が擲めるわけではない。「ノウハウ」というものは、元来そういうものである。レシピや設計図の数値などは、かなり詳細なデータ化によって、再現性や精度を高めることは可能だが、それは単に「(3)」の問題であって、ものの作りのセンスではない。むしろ、そういったデータに頼っていると、センスはいつまで経っても養われないだろう。レシピどおりに作っていても、一流の料理人にはなれないのである。それは、個々のデータの何がどんな意味を持っているのか、何が違えば結果はどう変わるのか、といったことが試行錯誤の中から生まれくるからであり、その体験をしなければ、ノウハウの

応用が利かない。それでは、オリジナルの作品を作れない工作者であり、機械と同じである。

したがって、現代のように、レシピアウハウというデータに満ち溢れている豊かな時代に育つと、必然的に本当の工作者は育たない。極めて育ちにくい時代であることはまちがいないだろう。こういう時代には、技術者自体が稀少な存在であるから、⁽⁴⁾自ずと価値が高くなるはずだ。引つ張りだこになる。しかし、それが本来の価値だと早合点してはいけない。技術の価値を認められる人間は、技術者以上に少ないから、正当な評価を受けることは、さらに難しい。

技術立国といわれる日本だが、技術者の枯渇という問題を抱えている。否、将来はもつと深刻になるだろう。不足しているのは、工学部で学んだエリートではない。おそらく、町工場などで働いていて、手作業でそのセンスを活かしているような人たちだろう。その人の目、その人の手でしか実現できない技術がたしかにある。それらを継承するためには、まずそういったセンスの存在を知ること、そして理解すること、さらに、同じくものを作るといふ体験を重ねること、しかない。「そんなことやっている暇はないんだ」と仕事をしている大人は言うだろう。そのとおり、そんなふうにならなければ、今の状況になつたのである。だからこそ、子供のうちから工作に慣れ親しむような環境が必要なのではないか。

(森博嗣『創るセンス 工作の思考』による)

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 言葉というのはアナログであって、漠然とした世界像を明確に分節化する媒体である。
- B 言葉というのはロジックであって、抽象的な既存物を具体物へと変換する装置である。
- C 言葉というのはファンタジーであって、ゆたかな外界を固定化する幻想の産物である。
- D 言葉というのはセンスであって、分断化できない世界を連続的にとらえる手段である。
- E 言葉というのはデジタルであって、もともとある概念を簡単に示すための記号である。

〔問二〕傍線(2)「それをイメージしたいから、「え、どんなオートバイが好き？」と映像で思考する人なら尋ねるだろう」とあるが、なぜここで「オートバイ」という言葉が使われるのか、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 映像で思考する人間は、オートバイの用途を多面的に想像できるが、その漠然たる全体に輪郭を与える時「オートバイ」という言葉が必要になるから。

B 映像で思考する人間は、オートバイというある一つの存在を、ほかの二輪車から区別・差異化するために「オートバイ」という言葉が必要になるから。

C 映像で思考する人間は、オートバイの様態を映像的に展開するが、その思考を他者へ伝達する手段として「オートバイ」という言葉が必要になるから。

D 映像で思考する人間は、オートバイの様々な有様を感覚的に展開できるが、それを限定的に捉える段階で「オートバイ」という言葉が必要になるから。

E 映像で思考する人間は、オートバイにも様々な種類があることを認識しており、それを単純化するために「オートバイ」という言葉が必要になるから。

〔問三〕空欄(3)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A オリジナルの完成度

B コピイの解像度

C ノウハウの習熟度

D トレースの経験

E スキルの多寡

〔問四〕

傍線(4)「技術の価値を認められる人間は、技術者以上に少ないから、正当な評価を受けることは、さらに難しい」とあるが、その具体的な事例としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 歌舞伎の技能は初めて見る者にもある程度は感得できるが、本当の意味では鑑賞通にしか見極められない。
- B 骨董茶碗こつとうちawanの価格は鑑定家にもある程度は判断できるが、本当の意味では熟達した陶芸家にしか見極められない。
- C 小説の優劣は文学研究者にもある程度は理解できるが、本当の意味では傑出した小説家にしか見極められない。
- D 包丁の良し悪しは調理の素人にもある程度は体感できるが、本当の意味では卓越した料理人にしか見極められない。
- E 投手の技量はデータ分析者にもある程度は推察できるが、本当の意味では強打者にしか見極められない。

〔問五〕

次の文A、Bのうち、筆者の考えに合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- A データ化できない試行錯誤の経験を積むことではじめて、言語的思考の枠外にある体験的技術を身体化しオリジナルな作品を生み出すことができる。
- イ 料理人がその技術を取得する際には「映像による思考力」が必要だが、その技能を弟子に身につけさせるためには言葉の使用が有効である。
- ウ 言葉で思考する人間は、ものごとの多くの内容が欠落した地点でしか考えられないため、達人の持つノウハウに接した場合、そこに含まれている豊かな情報を見落とすおそれがある。
- エ 技術の細部を具体的な映像として処理できるセンスを育成することで、データに頼らない、技術者の「映像による思考力」を回復させることができる。
- オ レシビやノウハウというデータが溢れているにもかかわらず、それらを体系化する環境が整備されていない点が、技術者の枯渇を生む要因となっている。

三 次の文章は、仁明天皇にのみように親しく仕えていた中将（左近少将良岑宗貞のこと）が、天皇の崩御にあつてひそかに出家・修行していた折の逸話である。これを読んで、後の間に答えなさい。（30点）

ふと失せにけりと聞こしめして、五条の后（5さい）の宮より、内舎人（うちどねり）を御使ひにて、野山を尋ねさせたまひけり。からくして、わりなく隠れたるところに、ゆくりなく入りにけり。え隠れあへで逢ひぬ。「宮の仰せごとには、『帝もおはしまさぬに、むつまじうおほしめしし人をだに、御形見にもと思ふべきを、かく世に失せ隠れたまひにたれば、いとなむ悲しき。』」などか、山林（やまはやし）に入らるとも、ここにだに消息（4）をいはるまじき。御里（みさと）、ありどころにも、音せられざんれば、いみじう泣きわぶなる。いかなる心にて、かくものせらるる』となむはべりしかば、こころの年ごろ、わりなく尋ねはべりて、かしく参りてはべる」といへば、

「仰せごと、かしくまりてなむ。帝隠れさせたまひて後、世に経べき心地しはべらざりしかば、かかる山の末（すゑ）にこもりはべりて、死なむを待ちはべるに、まだなむ、あやしく、生きめぐらひはべるに、いとかしこく訪（と）はせたまへること。わらはべのはべるところにも、心には、さらに忘れはべらずなむ」とて

(7) 「かぎりなき雲居（くもゐ）のよそになりぬとも人を心におくらさむやは

となむ申しつると (8) たまへ」といひける、いとかすかになむ、いとかなしける。その人にもあらずなりて、ただ糞（か）をな

む着たりける。中将なりしとき清げなりしを思ひ出でて、いとかなしかりける。片時（かたとき）人のあるべきところならねば、泣く泣く帰り参りぬ。

〔遍昭集〕による

注 五条の後の宮……仁明天皇の皇后、藤原順子。 内舎人……宮中の雑役をおこなう官人。

御里、ありどころ……自分の家や妻の家。

〔問一〕 傍線(1)「わりなく隠れたるところに」、(2)「ゆくりなく入りにけり」、(4)「消息をいはるまじき」、(6)「さらに忘れはべ
らず」の解釈としてもつとも適當なものを、それぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(1) わりなく隠れたるところに

- | | |
|---|---------------------|
| A | やっと奥のほうに身を潜めているところに |
| B | うまい具合に奥まっているところに |
| C | 見つからないように隠れているところに |
| D | せまくて人目につかないところに |

(2) ゆくりなく入りにけり

- | | |
|---|---------------|
| A | 堂々と入ってきたのだった |
| B | 強引に入り込んだのだった |
| C | あわててやってきたのだった |
| D | 突然に訪ねてきたのだった |

(4) 消息をいはるまじき

- | | |
|---|-------------------------|
| A | 手がかりを残してくださるはずではなかったのか |
| B | 安否を伝えて下さろうとしなかったのか |
| C | 意向を教えて下さろうとしなかったのか |
| D | 手紙を受け取れるようにするはずではなかったのか |

(6) さらに忘れはべらず

- | | |
|---|--------------------|
| A | 決して忘れてはおりません |
| B | いつそう忘れないようにと思っています |
| C | まったく思い返すこともありません |
| D | なかなか忘れられません |

〔問二〕 傍線(3)「むつまじうおぼしめしし」の主語は誰か、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 宮 B 帝 C 内舎人 D 中将 E 語り手

〔問三〕 傍線(5)「かくものせらるる」とは、具体的にはどのようなことを指しているのか。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 世間から隠れて不満を述べること
B 慣れ親しんだ人を形見に思うこと
C 世間から逃れて身を隠したこと
D 実家や妻の家に連絡をしないこと
E 妻らがひどく悲しんでいること

〔問四〕 傍線(7)の和歌は、この折の中將の、どのような気持ちをあらわしたのか。もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 後の宮の親切に感謝し、内舎人の帰路が遠く困難なことを心配する気持ち。
- B 帝の御恩に感謝し、出家しない宮中の人々の非情さを非難する気持ち。
- C 内舎人の苦勞を思い、遠くまで訪問してくれたことを心から感謝する気持ち。
- D 都に残してきた人々を思いやり、遠く離れていても心に思い続けている気持ち。
- E 出家後の自分の境遇を思い、崩御した帝のもとへ早く行きたい気持ち。

〔問五〕 空欄(8)には「言ふ」の敬語表現の連用形が入る。もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 言はれ
- B いらへ
- C 仰せ
- D 奏し
- E 啓し

